

2. 河川利用及び河川環境の現状と課題

〔旧途別川〕

旧途別川上流では、養魚のための水利用があるが、優先整備区間において水利用はない。

猿別川合流点から千住 14 号橋までの区間は耕作地を貫流している。この河川はかつて蛇行していた途別川から切り離されて、河床勾配が 1/2000 程度の緩やかな流れとなっており、河床は砂・礫・泥で構成されている。

河岸は、カシワ、ヤチダモ、ヤナギ林が河畔林を形成し、川岸にはヨシやミゾソバが群生している。鳥類では、住宅地や農耕地に生息するヒヨドリやカワラヒワ、ヒバリ、ノビタキのほか、水域ではキセキレイやアオサギが生息している。哺乳類では、キタキツネなどが生息している。魚類は、上流においてサケの遡上が確認され、緩やかな流れの中でウグイ類、フクドジョウ、トミヨ属やスジエビなども生息している。

水質については、旧途別川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないため、定期的な水質調査はされていないが、令和元年度に上流は千住 14 号橋、下流は相川 20 号橋で水質調査が実施された。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）は上流千住 14 号橋地点で 1.4mg/ℓ となっており、環境基準 A 類型（基準値 2mg/ℓ 以下）程度、下流相川 20 号橋地点で 0.8mg/ℓ となっており、環境基準 AA 類型（基準値 1mg/ℓ 以下）程度の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関との連携を図りながら、河川環境を保全していく必要がある。



▲千住 6 線橋より上流（上流部）



▲相川 20 号橋より上流（中流部）



▲猿別水門より上流（下流部）

[茂発谷川]

茂発谷川からの取水は、農業用水の利用がなされているが、これまでに渇水被害を生じた事例はない。

河川環境として、明倫川合流点から源流までの上流部は、周辺に農地やカラマツ植林地が形成されている。河床勾配は 1/50～1/100 程度であり、河道内に落差工が設置され、河床はブロックで覆われている区間が多い。魚類では、落差工の下流側に形成された淵で、石礫底の瀬などを利用するフクドジョウや緩やかな流れを利用するイバラトミヨ（トミヨ属淡水型）が生息している。植物では、ヤナギ類やケヤマハンノキなどの河畔林が分布し、林床にはヨシ類、アキタブキ、エゾイラクサが繁茂している。

西猿別橋から明倫川合流点までの中流部は、周辺に農地が形成されている。河床勾配は 1/90～1/130 程度であり、河床は砂礫で構成されている。河道内には落差工が設置され、所々に淵がみられるが平瀬状の流れが多い。魚類では、石礫底の瀬などを利用するフクドジョウ、ハナカジカのほか、

砂泥の堆積している箇所ではカワヤツメ属の幼生が生息している。植物では、河道沿いにヨシ類やアキタブキが繁茂し、所々にヤナギ類がみられる。水際にはノダイオウなどが生育している。また、部分的に山付き部があり、ケヤマハンノキやミズナラなどが生育している。鳥類では、森林に生息するセンダイムシクイやシジュウカラのほか、原野に生息するアオジ、ホオジロなどが確認されている。

猿別川合流点から西猿別橋までの下流部は、周辺に農地が形成されており、河道沿いに家屋が点在している。河床勾配は 1/130 程度であり、河床は砂礫で構成されている。河道内には落差工が設置されており、平瀬状の流れが多い。落差工には魚道が設置されておらず、広範囲を利用する遊泳魚であるアメマスやサクラマス（ヤマメ）、エゾウグイはこの区間でのみ確認されている。植物では、主にヤナギ類の河畔林が形成され、林床にはヨシ類が生育し、水際にはノダイオウなどが生育している。鳥類では、草地に生息するノビタキやベニマシコなどが確認されている。

水質については、茂発谷川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないため、定期的な水質調査はされていないが、平成 24 年度に西猿別橋付近及びホープランド橋付近において水質調査が実施された。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）の測定値は西猿別橋付近で 0.5mg/ℓ未満、ホープランド橋付近で 0.5mg/ℓ未満となっており、AA 類型（基準値 1mg/ℓ以下）程度の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関と連携を図りながら、河道の連続性を確保し、河川環境を保全していくことが必要である。



▲新和橋より上流（上流部）



▲茂発谷第二号橋より上流（中流部）

[糠内川]

糠内川は現在のところ河川の水利用はない。

河川空間の利用としては、釣りを楽しんでいる姿がみられる。

河川環境として、中里橋から源流までの上流部は、周辺に農地が形成されており、一部には市街地が形成されている。また植林地としての利用も目立つ。河床勾配は 1/120～1/190 程度であり、河床は礫主体で構成されているが、舟越橋付近では岩床となっており、平瀬状で単調な流れが多い。魚類では、瀬や淵などに生息するサクラマス（ヤマメ）や石礫底の瀬などを利用するフクドジョウが生息している。植物では、河畔林が残る区間でヤナギ類やケヤマハンノキが生育し、河岸にはヨシ類などの草本類が繁茂している。

万代橋上流付近から中里橋までの中流部は、周辺に農地や植林地が形成されており、左岸側は山付きの区間が広がる。河床勾配は 1/120～1/150 程度で、河床は礫主体で構成されており、早瀬や淵など多様な流れが形成されている。魚類では、瀬や淵などに生息するサクラマス（ヤマメ）や石礫底の瀬などを利用するハナカジカが生息している。植物では、主にドロノキなどのヤナギ類の河畔林が形成され、左岸側の山付きにはハルニレが生育している。林床にはヨシ類、アキタブキ、エゾイラクサなどの草本類が密生している。鳥類では、河畔林にとまるオジロワシや、水面上を飛行するカワセミが確認されている。哺乳類では、林内の広い範囲でエゾシカ（足跡）やキタキツネが生息している。両生類では、河畔林内の水たまりでエゾアカガエルの産卵が確認されている。甲殻類では、山付き部の沢でニホンザリガニが生息している。



▲中里橋より下流（中流部）

猿別川合流点から万代橋上流付近までの下流部は、周辺に市街地が形成されており、開けた環境となっている。河床勾配は 1/150 程度で、河床は砂礫で構成されており、瀬淵が形成されている。魚類では、瀬や淵などに生息するサクラマス（ヤマメ）や、ウグイなどが生息している。植物では、河道内にヨシ類やアキタブキ、オオイトドリなどの草本類が繁茂しており、猿別川合流点付近ではヤナギ類が生育している。鳥類では、水辺に生息するカワセミやイワツバメが確認されている。また、猿別川合流点付近ではタンチョウも確認されている。両生類では、山裾の水たまりにエゾアカガエルの産卵が確認されている。



▲万代橋より下流（下流部）

水質については、糠内川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないため、定期的な水質調査はされていないが、平成 24 年度に万代橋付近及び上五位川合流点付近において水質調査が実施された。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）の測定値は万代橋付近で 0.5mg/ℓ未満、上五位川合流点付近で 0.5mg/ℓ未満となっており、AA 類型（基準

値 1mg/ℓ以下) 程度の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関と連携を図りながら、河川環境を保全していく必要がある。

[サラベツ川]

サラベツ川下流では、養魚のための水利用があるが、優先整備区間において水利用はない。

河川環境として、更別橋（国道 236 号）から帯広・広尾自動車道までの区間は畑地が広がっている。河床勾配は 1/150 程度であり、礫河床を呈している。

植物ではヤナギ類の河畔林が形成され、水際はヨシ、ミゾソバ、アキタブキ、エゾイラクサ、オオイトドリがみられる。鳥類では、住宅地や農耕地に生息するヒヨドリやカワラヒワ、ハシブトガラ、キジバトのほか、水域ではカルガモなどが生息している。哺乳類では、キタキツネなどが生息している。魚類については、優先整備区間においては生息が確認されなかったが、隣接するサッチャルベツ川においては、スナヤツメ北方種やイバラトミヨ（トミヨ属淡水型）、フクドジョウなどが生息している。

水質については、サラベツ川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないため、定期的な水質調査はされていないが、令和元年度に帯広・広尾自動車道下流（第 11 号橋梁）で水質調査が実施された。

調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）の最大値は 10mg/ℓ以上を示し、E 類型（基準値 10mg/ℓ以下）の基準を満たさない程の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関と連携を図りながら、河岸植生・河床形状の回復や水質の改善等により、多様な河川環境を創出する必要がある。



▲第 11 号橋梁より下流（上流部）



▲更別橋より上流（下流部）

[サッチャルベツ川]

サッチャルベツ川は渇水期になると水枯れになる特徴を持っており、現在のところ河川の水利用はない。

河川空間の利用としては平成 17 年に完成した「福祉の里」があり、緩傾斜護岸によって水辺に近づきやすい親水空間が整備されている。

河川環境として、第 2 南サラベツ川合流点から丘陵地までの上流部は、周辺に耕作地が形成されている。河床勾配は 1/400 程度であり、河床は砂礫で構成されている。また、河道内には落差工が設置されている。魚類では、緩やかな流れを利用するスナヤツメ北方種やイバラトミヨ（トミヨ属淡水型）、石礫底の瀬などを利用するフクドジョウなどが生息している。植物では、ヤナギ類が広く分布し、ハルニレやヤチダモもみられる。林床はクサヨシ群落が広範囲に分布し、水際にはノダイオウ、ホソバドジョウツナギ

ギ、河岸から背後地にはカラフトイバラやチドリケマンなどが多数分布する。鳥類では、原野に生息するアオジやベニマシコ、森林に生息するウグイスやヤブサメなどの鳥類が生息しているほか、マガモなど水辺の鳥も確認されている。両生類では、河道内周辺や湿地にエゾアカガエルが生息している。

更新橋から第2南サラベツ川合流点までの中流部は、周辺に耕作地や市街地が形成されている。河床勾配は1/130～1/150程度であり、上流と同様に河床は砂礫で構成されている。魚類では、緩やかな流れを利用するスナヤツメ北方種やイバラトミヨ（トミヨ属淡水型）、石礫底の瀬などを利用するフクドジョウなどが生息している。植物では、草地在河川沿いに連続して分布しており、カラマツ植林が部分的に隣接している。水際にはノダイオウやホソバドジョウツナギが生育している。鳥類では、原野に生息するアオジやカワラヒワのほか、水辺に生息するカワセミが確認されている。

猿別川合流点から更新橋までの下流部は、周辺に牧草地が形成されている。河床勾配は 1/150～1/170 であり、河床は礫主体で構成されている。魚類では、石礫底の瀬などを利用するハナカジカやフクドジョウなどが生息している。植物では、中流部と同様に草地在河川沿いにみられ、部分的にヤナギ林が分布している。鳥類では原野



▲更新橋より上流（上流部）



▲更別橋より上流（中流部）



▲勢望橋より下流（下流部）

に生息するチュウヒやオオジシギのほか、河畔林にはアオジなどが生息している。

水質については、サッチャルベツ川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないため、定期的な水質調査はされていないが、平成 24 年度に農友橋及び中昭橋において水質調査が実施された。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）の測定値は農友橋で 0.6mg/ℓ、中昭橋で 0.8mg/ℓとなっており、AA 類型（基準値 1mg/ℓ以下）程度の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関と連携を図りながら、川の連続性を確保するとともに、河川環境を保全していく必要がある。



▲サッチャルベツ川に隣接する「福祉の里」と緩傾斜護岸

[帯広川]

帯広川からの取水は、雑用水（修景用）での利用がなされているが、これまでに渇水被害を生じた事例はない。

河川空間の利用としては、釣りを楽しんでいる姿が見受けられるほか、環境教育の場としても利用されている。また、地域住民の散策、通勤・通学、休日のサイクリングなど自転車通路としても利用されている。このような河川空間の利活用の現状を踏まえ、「かわまちづくり」^{注1)}の精神に基づき河川整備を行う必要がある。

河川環境として、イマナイ川合流点から源流までの上流部は、周辺に牧草地や畑地が形成されている。河床勾配は1/100～1/150程度であり、河床は主に礫で構成されている。魚類では、礫底を好むニジマス、瀬や淵などに生息するサクラマス（ヤマメ）や石礫底の瀬などを利用するフクドジョウなどの魚類が生息している。植物では、河川沿いにヤナギ林や草地がみられ、ハルニレ・ヤチダモ林が点在している。その他にカラマツ植林が分布する。鳥類では、原野に生息するオオジシギやシマアオジ（平成8～16年に確認）、水辺に生息するマガモなどが確認されている。哺乳類では、エゾモモンガなどが生息している。両生類では、河畔林の林床でエゾサンショウウオの産卵池が確認されている。

新川橋付近からイマナイ川合流点までの中流部は、^{しんかわばし}周辺に畑地が形成されている。河床勾配は1/150～1/200程度であり、河床は礫が主体となっている。魚類では、瀬や淵などに生息するサクラマス（ヤマメ）やウグイなどが生息している。植物では、河川沿いにヤナギ林や草地がみられ、ハルニレ・ヤチダモ林が連続して分布している。河道内の林床はヨシ等が分布し、水際にノダイオウ、堤防付近にケショウヤナギやアカンカサスゲなどが生育している。鳥類では、水辺に生息するショウドウツバメのほか、オオジシギの繁殖行動やカワセミの営巣地が確認されている。

十勝川合流点から新川橋付近までの下流部は、周辺に市街地や畑地、耕作地が形成されている。河床勾配は1/200～1/300程度であり、河床は主に礫で構成されている。



▲共栄橋より下流（上流部）



▲南7線橋より上流（中流部）



▲新川橋より下流（下流部）

注1) 「かわまちづくり」：河川空間とまちの空間の融合が図られた、良好な空間形成を目指す取り組みのこと。

魚類では、緩やかな流れを利用するスナヤツメ北方種、瀬や淵などに生息するウグイ、石礫底の瀬などを利用するハナカジカなどが生息している。植物では、ヤナギ林がモザイク状にみられるほか、河道内にヨシ等が分布しており、水際にノダイオウ、堤防付近にケショウヤナギやアカンカサスゲなども確認されている。鳥類では、水辺に生息するハクセキレイやアオサギ、カワセミなどが確認されているほか、オオジシギの繁殖行動が確認されている。哺乳類では、ネズミ類やコウモリ類などが生息している。

水質については、帯広川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされており、ウツベツ川合流点から下流（ウツベツ川含む）はB類型、上流はA類型である。平成30年度の基準点におけるBOD（生物化学的酸素要求量）75%値は、札内川合流点前（B類型指定）で2.4mg/ℓ、西8条橋（A類型指定）で0.8mg/ℓで、それぞれ環境基準（B類型の基準値3mg/ℓ以下、A類型の基準値2mg/ℓ以下）を満たしている。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関との連携を図りながら、河川環境を保全していく必要がある。

[ウツベツ川]

ウツベツ川は現在のところ河川の水利用はない。

現在の河川空間利用としては、環境教育の場として利用されているほか、地域住民の散策、通勤・通学、休日のサイクリングなど自転車通路としても利用されている。このような河川空間の利活用の現状を踏まえ、「かわまちづくり」の精神に基づく河川整備を行う必要がある。

河川環境として、空港橋から大空二号橋までの上流部は、周辺に市街地が形成され、一部に緑地や耕作地がみられる。河床勾配は1/200程度であり、河床は砂礫で構成されている。魚類では、石礫底の瀬などを利用するフクドジョウや緩やかな流れを利用するエゾトミヨなどが生息している。植物では、クサヨシ群落が広範囲に分布し、水域から水際にはノダイオウ、ホソバドジョウツナギ、エゾミクリのほか、陸域にはアカンカサスゲなどが生育している。鳥類では、オオジシギの繁殖行動やハイタカの飛行が確認されている。哺乳類では、ヒナコウモリ科の一種が確認されている。両生類では河道内に広くエゾアカガエルが生息している。



▲南10線橋より下流（上流部）



▲善隣橋より上流（中流部）



▲蹄橋より上流（下流部）

緑ヶ丘橋から空港橋までの中流部は、周辺に市街地や緑地公園が形成されている。河床勾配は上流部同様1/200程度であり、河床は砂礫で構成されている。魚類では、石礫底の瀬などを利用するフクドジョウや緩やかな流れを利用するエゾトミヨなどが生息している。植物では、クサヨシ群落が広範囲に分布し、水域から水際にノダイオウ、ホソバドジョウツナギ、エゾミクリのほか、陸域にはチドリケマンなどが生育している。鳥類では、住宅地や農耕地に生息するヒヨドリのほか、オオジシギの繁殖行動が確認されている。哺乳類では、ヒナコウモリ科の一種が確認されている。両生類では、河道内に広くエゾアカガエルが生息している。

帯広川合流点から緑ヶ丘橋までの下流部は、周辺に市街地が形成されている。河床勾配は1/200～1/300程度であり、河床は砂礫で構成されている。魚類では、瀬や淵などに生息するエゾウグイ、石礫底の瀬などを利用するフクドジョウやハナカジカなどが生息している。植物では、ヤナギ類やシラカンバが点在しており、河道内にはクサヨシ群落が広範囲に分布し、水域から水際

にヒメウキガヤ、ノダイオウなど、陸域にはケショウヤナギなどが生育している。鳥類では、住宅地や農耕地に生息するヒヨドリやカワラヒワなどのほか、水辺に生息するマガモなども確認されている。哺乳類では、ヒナコウモリ科の一種が確認されている。両生類では河道内に広くエゾアカガエルが生息している。

水質については、ウツベツ川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされており、B 類型となっている。帯広市により中駒橋と芙蓉橋において定期的な水質調査が実施されており平成 29 年度の調査では、BOD（生物化学的酸素要求量）75%値は、中駒橋では 0.5mg/ℓ未満、芙蓉橋では 0.6mg/ℓで、ともに AA 類型（基準値 1mg/ℓ以下）程度の水質である。

また、平成 24 年度に蹄橋上流および防衛 3 号橋上流において水質調査が実施された。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）の最大値は蹄橋上流では 0.5mg/ℓ、防衛 3 号橋上流では 0.5mg/ℓ未満となっており、AA 類型（基準値 1mg/ℓ以下）程度の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関との連携を図りながら、河川環境を保全していく必要がある。

[柏林台川・第二柏林台川]

柏林台川および第二柏林台川は現在のところ河川の水利用はない。

水辺空間の利用として、広陽橋と柳橋の間に散策路と親水広場があり、周辺住民の憩いの場や子どもたちの遊び場として親しまれているほか、地域住民の散策、通勤・通学、休日のサイクリングなど自転車通路としても利用されている。このような河川空間の利活用の現状を踏まえ、「かわまちづくり」の精神に基づく河川整備を行う必要がある。

柏林台川の河川環境として、周辺は市街地が形成されている。河床勾配は $1/200 \sim 1/400$ 程度であり、河床は砂礫で構成されている。魚類では、瀬や淵などに生息するサクラマス(ヤマメ)やウグイのほか、石礫底の瀬などを利用するフクドジョウや緩やかな流れを利用するイバラトミヨ(トミヨ属淡水型)などが生息している。植物では、ヤナギ類やシラカンバが点在し、水域から水際にはノダイオウ、エゾミクリなどが生育している。鳥類では、住宅地や農耕地に生息するヒヨドリやハシブトガラスなどが確認されており、水辺に生息するマガモなども確認されている。哺乳類では、コウモリ目の一種が確認されている。両生類では、河道内に広くエゾアカガエルが分布している。

第二柏林台川の河川環境として、周辺は市街地が形成されている。河床勾配は $1/150 \sim 1/200$ 程度であり、河床は砂礫で構成されている。柏林台川と連続しているため、柏林台川と同様の魚類が生息していると考えられる。植物では、ヤナギ類とシラカンバが点在するが、水域から水際にはノダイオウ、ホソバドジョウツナギなどが生育している。鳥類では、住宅地や農耕地に生息するヒヨドリやハシブトガラスなどが確認されており、水辺に生息するカモ類なども確認されている。哺乳類では、コウモリ目の一種(フン)が確認されている。両生類では広くエゾアカガエルが分布している。

水質については、柏林台川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないが、帯広市により柏西台橋において定期的な水質調査が実施されており平成 29 年度の結果では、BOD(生物化学的酸素要求量)75%値は $0.6\text{mg}/\ell$ で、AA 類型(基準値 $1\text{mg}/\ell$ 以



▲広陽橋上流の散策路(柏林台川)



▲柏西2号橋より上流(柏林台川)



▲新開橋より下流(第二柏林台川)

下) 程度の水質である。また、平成 24 年度に啓西公園付近において水質調査が実施された。調査結果によると、BOD (生物化学的酸素要求量) 最大値は 0.6mg/ℓとなっており、AA 類型 (基準値 1mg/ℓ以下) 程度の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関との連携を図りながら、河川環境を保全していく必要がある。

〔伏古別川〕

伏古別川は現在のところ河川の水利用はない。

水辺空間の利用として、啓北橋上流に散策路と親水広場があり、周辺住民の憩いの場や子どもたちの遊び場として親しまれている。

河川環境として、周辺は市街地が形成されている。河床勾配は 1/400～1/600 程度であり、河床は砂礫で構成されている。魚類では、瀬や淵などに生息するエゾウグイや緩やかな流れを利用するエゾホトケドジョウ、イトヨ日本海型などが生息している。植物では、ヤナギ類の低木が点在し、水域から水際にはミクリやエゾミクリ、ホソバドジョウツナギなどが生育している。鳥類では、住宅地や農耕地に生息するカワラヒワやハシブトガラスなどが確認されており、オオジシギの繁殖行動も確認されている。哺乳類では、ヒナコウモリ科の一種が確認されている。

水質については、伏古別川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないが、帯広市により北親橋において定期的な水質調査が実施されており平成 29 年度の結果では、BOD（生物化学的酸素要求量）75%値は 2.3mg/ℓと、B 類型（基準値 3mg/ℓ以下）程度の水質である。また、平成 24 年度にたいわ歩道橋上流地点において水質調査が実施された。調査結果では、BOD（生物化学的酸素要求量）最大値は 0.8mg/ℓとなっており、AA 類型（基準値 1mg/ℓ以下）程度の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関との連携を図りながら、河川環境を保全していく必要がある。



▲啓北橋上流の散策路



▲伏古別橋より上流

〔美生川〕

美生川からの取水は、農業用水での利用がなされているが、これまでに渇水被害を生じた事例はない。

河川空間の利用としては、芽室町市街地に隣接する河川敷がパークゴルフ場として利用されているほか、釣りを楽しむ人々の姿が見受けられる。

河川環境として、上流域の山地には森林が広がっており、平野部となる中流域からは畑地が広くみられるようになる。下流域では芽室町市街地が隣接する。河床勾配は 1/100～1/120 程度であり、河床は砂礫で構成されている。植物では、ヤナギ類やシラカンバ、ケヤマハンノキなどの河畔林が形成され、礫河川を象徴するケシヨウヤナギもみられる。対象河川周辺における動物として、魚類では、瀬や淵などに生息するサクラマス（ヤマメ）や石礫底の瀬などを利用するハナカジカなどが生息している。鳥類では、住宅地や農耕地に生息するヒヨドリやカワラヒワなどのほか、水域を利用するハクセキレイなども分布している。哺乳類では、エゾシカやキタキツネなどが生息している。

水質については、美生川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされており、全域で AA 類型である。平成 30 年度の基準点における BOD（生物化学的酸素要求量）の 75%値は 0.5mg/ℓ未満で、環境基準値（AA 類型の基準値 1mg/ℓ以下）を満たしている。また、平成 29 年度に新嵐山橋において水質調査が実施された。調査結果によると BOD（生物化学的酸素要求量）測定値は、0.6mg/ℓで、環境基準値（AA 類型の基準値 1mg/ℓ以下）を満たしている。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関との連携を図りながら、河川環境を保全していく必要がある。



▲西伏美橋より下流（上流部）



▲新嵐山橋より上流（中流部）



▲大成橋より下流（下流部）

[ピウカ川]

ピウカ川は現在のところ河川の水利用はない。

河川空間の利用としては、環境学習のイベントが開催されるなど環境教育の場として利用されている。

河川環境として、上流域から下流域にかけて畑地が広がっており、下流域では芽室町市街地が隣接する。河床勾配は 1/150 程度であり、河床は砂礫で構成されている。植物では、ヤナギ類やシラカンバなどの河畔林が形成され、水際にはヨシ類やアキタブキなどがみられる。対象河川周辺における動物として、魚類では、瀬や淵などに生息するサクラマス（ヤマメ）や石礫底の瀬などを利用するハナカジカなどが生息している。鳥類では、住宅地や農耕地に生息するヒヨドリやカワラヒワなどのほか、水域を利用するマガモなども分布している。哺乳類では、エゾシカやキタキツネなどが生息している。

水質については、ピウカ川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないため、定期的な水質調査はされていないが、平成 29 年度に高岩橋及び美生六号橋において水質調査が実施された。調査結果によると、BOD（生物化学的酸素要求量）測定値は、ピウカ川①高岩橋（下流域）で 0.5mg/ℓ、ピウカ川②美生六号橋（上流域）で 0.6mg/ℓ で、AA 類型（基準値 1mg/ℓ 以下）程度の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関との連携を図りながら、河川環境を保全していく必要がある。



▲西美生橋より上流（上流部）



▲美生六号橋より下流（中流部）



▲芽室公園・柏菖橋より上流（下流部）

〔佐幌川〕

佐幌川からの取水は、養魚のための利用がなされている。

河川空間の利用としては、隣接する「サホロリゾート」により、サホロ湖におけるカヌーや釣り体験等の場として利用されている。また、サホロ湖上流端にはキャンプ場があり、多くの観光客に利用されている。

河川環境として、上流地の山地には森林が広がっており、中下流域では牧場・畑等が広がり、中流域では新得町市街地、下流域では清水町市街地が隣接する。河床勾配は 1/200 程度であり、河床は砂・礫で構成されている。魚類では、サホロ湖において、ニジマス、アメマス、サクラマス（ヤマメ）やワカサギ、上流では石礫底の瀬などを利用するフクドジョウやハナカジカなどが生息している。植物では、ヤナギやハルニレなどの河畔林が広く形成され、ミズナラ、エゾイタヤ、シナノキなどもみられる。また、また、カラマツ、トドマツ等の植林種、林床にはクマイザサ、フッキソウなどがみられる。鳥類では、コゲラ、エナガ、シジュウカラなどのほか、湖面上にはオオハクチョウ、マガモがみられる。哺乳類では、エゾシカ、キタキツネの生息が確認され、両生類では、湿地や水たまりでエゾサンショウウオが確認されている。

水質については、佐幌川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づき類型指定がされており、金平川合流点から下流は B 類型、上流は A 類型である。平成 30 年度の基準点における BOD(生物化学的酸素要求量)の 75%値は、佐幌橋 (B 類型指定) で 2.5mg/ℓ、清水橋 (A 類型指定) で 1.2mg/ℓ、人道橋 (A 類型指定) で 0.5mg/ℓ 未満で、いずれも環境基準 (B 類型の基準値 3mg/ℓ 以下、A 類型の基準値 2mg/ℓ 以下) をそれぞれ満たしている。また、平成 29 年度に佐幌橋において水質調査が実施された。調査結果によると、佐幌橋 (B 類型指定) の BOD (生物化学的酸素要求量) の測定値は 0.8mg/ℓ で、環境基準値 (B 類型の基準値 3mg/ℓ 以下) を満たしている。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関との連携を図りながら、ダム周辺の良い環境状況を保全していく必要がある。



▲佐幌ダムより下流（上流部）



▲橋井橋より上流（中流部）



▲清水橋より上流（下流部）

[ペケレベツ川]

ペケレベツ川からの取水は、雑用水(防火用)の利用がなされているが、これまでに渇水被害を生じた事例はない。

河川空間の利用としては、川沿いに清水公園（ペケレの森）の散策路が整備されており、人々の憩いの場となっている。

河川環境として、佐幌川合流点より 1.2km の地点から上流へ 2km の区間が市街地となっており、その他の後背地は畑地として利用されている。河床勾配は $1/48 \sim 1/66$ 程度であり、河床は砂礫で構成されている。魚類では、瀬や淵などに生息するアメマスや石礫底の瀬などを利用するハナカジカなどが生息している。植物では、水際にはヤナギ類、法面上部にはハルニレやミズナラ、ヤチダモ、ケヤマハンノキなどの河畔林が形成され、林床にはトクサ、クマイザサ、エゾイラクサなどがみられる。鳥類では、住宅地や農耕地でみられるトビやハシブトガラス、スズメ、森林を好むコゲラやヒガラ、ゴジュウカラなどのほか、水辺を利用するカワガラスやカワセミ、ヤマセミなども確認されている。哺乳類では、エゾシカやキタキツネ、エゾリス、ネズミ類などが確認されている。

水質については、ペケレベツ川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないため、定期的な水質調査はされていないが、平成 29 年度に下流域（新清橋）、中流域（遊砂地）、上流域（1 号えん堤下流）の各一点において水質調査が実施された。BOD（生物化学的酸素要求量）測定値は、いずれの地点においても $0.5\text{mg}/\ell$ 未満で、AA 類型（基準値 $1\text{mg}/\ell$ 以下）程度の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関との連携を図りながら、河川環境を保全していく必要がある。



▲上流部



▲新清橋より上流（中流部）



▲新錦橋より上流（下流部）

[パンケ新得川]

パンケ新得川からの取水は、雑用水(防火用)の利用がなされているが、これまでに渇水被害を生じた事例はない。

河川空間の利用としては、釣りを楽しんでいる姿が見受けられるほか、河川沿いがフットパスとして整備されている。

河川環境として、上流域から下流域にかけて畑地が広がっており、下流には右岸に新得町市街地が形成されている。河床勾配は 1/50～1/75 程度であり、河床は砂礫・一部露岩で構成されている。魚類では、瀬や淵などに生息するアメマスやサクラマス（ヤマメ）のほか、石礫底の瀬などを利用するフクドジョウや、緩やかな流れを利用するスナヤツメ北方種などが生息している。植物では、河岸にはヤナギ類やケヤマハンノキなどがみられる。草本としてイネ科植物やオオイトドリなどが生育している。鳥類では、住宅地や農耕地に生息するヒバリや原野に生息するアオジなどのほか、水域を利用するハクセキレイなども分布している。哺乳類では、エゾシカやキタキツネが生息している。甲殻類では、ニホンザリガニが確認されている。

水質については、パンケ新得川は公共用水域における「生活環境の保全に関する環境基準」に基づく類型指定がされていないため、定期的な水質調査はされていないが、平成 29 年度に牧野橋上流において水質調査が実施された。BOD（生物化学的酸素要求量）測定値は、0.9mg/ℓで、AA 類型（基準値 1mg/ℓ 以下）程度の水質である。

このような現状を踏まえ、地域住民や関係機関との連携を図りながら、河川環境を保全していく必要がある。



▲九号川合流点付近より上流（上流部）



▲牧野橋より上流（中流部）



▲神社橋人道橋より上流（下流部）